



文化ら己

越新豊田武門
後向上舎連中

聖節

去冬より嫁英以寧了る在知事の
是去甲の老作をゆりて

春和より

陽光や虚室はあやをえおらそ

風光

又出らるる笑えよるものあらと梅水

冬和候

流照

三つ也

積雲はるわらうらに初日の出

冬和より

雞竹

波のせさく離乃たさき

冬和より

以寧

赤はに赤はたる春の月ゆりて

春和より

白亀

春三

白梅や媚ねはまよふとん

青浴閣

白飛

号やゆらげ紙しとととぬり

回春舎

唐里

暖しきや心もよるる跡也

新雲舎

素院

水窓は板とと答ふ梅も花

花樹

尺の面をうけぬ物かゝるは世に 南月
 ちやかゝる家の業はは福多き事 双飛
 川をらぬ氣は文程よく初度 二五
 炭ついで燈は中隙や火の面 興柳
 青芝の中へ一瞥さるゝと筆 文志
 片言は縁とぬもやうへひ初 誓年
 出代や忘の浮名とてまじき度 青浦
 伍保娘乃は粧をと世の姿ひか 仙杖

表文入や世の絶を解て藤の 庭橋
 雛の間や花らうけてもまじき 茶庭
 松をこぼれても考れまじき 杜阮
 昌代や水乃か城の初のはら 玉泉
 空のふれ橋くの要や熊目 春桂
 東月以や白山甲の雪かふる 其山
 屋より張懸るるやめりか摘 美景
 積りや気とさしけりて雄鷹声 鼓吹

三
 三

艶なき音も女くかへんるるる 盲人 新琴
 りぞり止りてやうるるるるるる 白兔
 其宗よや 以志后
 山垣やむるに氣のまはひも 操舟
 水魚や雪けよは 東奉
 ういさむりな 二二
 藤花や枝お波の音こゝ 何代
 餘五

山よりも先くあふや 後松亭
 まさくふ 徳雅
 志のめいとく 南泉

東路よ通

情乞のむ 情乞
 一トとけ 晴月楼
 然る雪の不二 琴今哉
 日れ 静壽
 紅葩

此其より法者乃法者なり
 周くんとのうらとあ

世初人々朝の鳥に翼羽下下媒媒英
和く風と砦る鳥渡上御地將以寧

石
さねは

子の采納乃好とをを全知

今又之矢のこしくなら年塔 白亀

雪とむも糸一の定糸 媒英

兵部之工丈と才子に海まで 以寧

ぬる居の糸をうわとむと 杏子

物も物なり他も大洲と市 慈徳

永乃をより此七り七方 双珠

夕月のゆらぎに新御ウ 五松

橋を暗くし糸の蓮の糸 繁生

向を結志似して小僧小僧 若浦

小陸道に加賀のふがう 文定

高心も取れく子糸の夜光 若村

今て本家と増る家持
 経済も筋目紀して取捨の
 神代より倭の月と列く
 西も東もゆるゆるとそそ
 坂も半子とそそと近居
 長命じさくは此流小不事
 川はゆるゆると流るる
 二
 此流は流るる之傳乃候中
 詠
 山
 詠
 山

どちらにも移るのむと論
 流るるも物よりも年一の功
 古より家とまらふと立身
 波も此中へぬ日と月松風
 歌もあふと豫列りさへ
 藤もむとまき人も皆か増りて
 詩もあふと歌もあふと結る中
 鶴も鳩もと交るるを餅と推し

風光
 変身
 杜流
 玉泉
 鼓吹
 美景
 操券

城下ハ互し遠くを眺ま
ふ光
穂了也も行ある月徳林
兼月
カ駐ル龍子番れ生もの
二雲

古歌仙り一巡

糸思

冬に雪うぬ人をもと一年の市
蘇味
清ふあうみりく客やよれ梅
悠雅
帆のこころ日梅ひししの名
南原

水清

春和入

花よりゆらり月ひさかた
清きこいふこころふを恨み
の横やん物も知りぬ
福の月をとらぬ梅ひしし

子晴の物とよきとあ

世のせ程ありおとあふやの梅
深英
月雪れ甚し又まへ一まれ音
以寧

